

叡山文庫天海藏「蘇悉地羯羅經略疏」

建久点に見える類聚名義抄の逸文

滋賀県大津市の叡山文庫に「蘇悉地羯羅經略疏」七帖がある（蔵書番号、天海蔵三四九）。本書は「昭和現存天台書籍綜合目録」四三四頁に掲載されて居り、中田祝夫博士が「古点本の国語学的研究・総論篇」二七〇頁で言及され、ヲコト点が星点は西墓点に似ながら他点が少異あることに注意されて居り、又、遠藤嘉基博士・広浜文雄氏共編の「新版新点本書目」五一頁・八七頁・一三五頁にも所収の本である。本書は巻第一から巻第七までの全七巻の完本で、各帖粘葉装、縦二三・六種、横一四・一種、押界七行（界幅約一・九種、上欄の高さ一・四種、下欄の高さ〇・九種）各巻首に「天海蔵」の墨印がある。識語と加点の状態とは次の通り。





能性が多く、従つて年代的にこの間に位する建久の朱点は天台関係の僧の加点ではないかと考へられるわけである。

然るに中田博士は、上述の神光院慈念が識語で「作者自筆本」を見てゐたと言つてゐることからして、観智院本の原本は真言宗の僧の作であらうと推測されてゐる（上掲論文）。

所が、本論からすれば、その原本は恐らく完成以後さほど時間の経つてゐない時に、天台宗の学侶の目に触れたことになる。しかし、当時としては、天台と真言との交流が絶無であつたとする必要はないと思はれるし、現に本書も、天承元年に「以仁和寺（真言宗）円楽寺律師御房」で書写されて、その本文に、天台宗の僧侶の手に成るかと思へられる建久点を加へられてゐるわけである（中田博士前掲著書参照）。

結局、観智院本の作者は真言宗とは限定されず、或いは天台宗だつたかも知れないとも思ふのである。文永六年（一二六九）に天台宗の僧仙覚が「万葉集注釈」に観智院本を引用してゐること（中田博士上掲論文）も考へ合すべきであらう。

次に、上掲の十五条から考へられることは、観智院本と比べるのと、先づ和訓では、建久点のうち(9)の「ヨシ」と(13)の「タ、ク」だけが見えず、その他はすべて観智院本の中に見える和訓である。又、漢字の音注を、観智院本では、片仮名の外、類音や反切などでも表記してゐるのに、それに対して建久点の引用は殆ど全部これを片仮名で記してゐるといふことである。これは、もとの辞書には漢字であつたのを引用に際して片仮名に改めたのか、或いはもと／＼片仮名注音の異本名義抄があつたのか、どちらかか

思ふが、宗性の「文華風月至要抄」（中田博士『文華風月至要抄』所載の類聚名義抄佚文）訓点語と訓点資料七）にも片仮名音注の部分があり、又、実弘の「自他宗雜指示抄」の逸文もすべて片仮名音注である（平岡定海氏類聚名義抄の逸文「言語」と文芸昭三四・一）ことなどと考へ合はせると、片仮名音注の異本名義抄が既に成立してゐた可能性も相当にあると思ふのである。（蘇悉地羯羅經略疏の調査の折には小林芳規氏から大きな御助力を頂いた。記して御礼申上げる。）  
（三五・二・八）  
（築島裕）